
Infinite Stratos -Futures Road-

暁

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Infinite Stratatos - Futures Road

【Nコード】

N3531Y

【作者名】

暁

【あらすじ】

偶然ISを駆る事となった少年と、ISと共に生きてきた青年の物語。

この二次創作は、原作の設定・世界観・IS・人物を中軸にしなからも、もう一人オリジナルの主人公を追加して、設定等を作者が自分なりに細かくしたりしています。また、作者は「機動戦士ガンダム00」の影響を多大に受けていますので、そちらの要素が出て

くる場合もありますので、ご了承ください。

不定期連載です。あらすじはある程度まとまっているので、見切り発車ではありません。

0・騎士の覚醒（アウェイニング）（前書き）

始めまして。暁です。

自身初投稿です。

まだなれない部分も多いですが、書き続けて行きたいと思います。

まず序章。

物語の動き始めた時。

0・騎士の覚醒（アウェイニング）

世界というのは、常に止まらず動き続けているものである。

そして人の運命も、絶えず動き続けている。

そしてそれは、時に遅く、時に急激である。

数年前、全世界の弾道ミサイル発射装置がハッキングされ、制御不能となったそれらが日本へ向かっていた。

その数、およそ2000。 と思われていた。

後に判明した事 各国政府の元で嚴重に隠蔽された
だが、実際に日本へ向かったミサイルは、そのうちの約68パーセントだった。

そして残りの32パーセントは、あるうことが、EU圏内の複数の市町村へ向かっていた。

都市部に近いヨーロッパのとある田舎町。

その日、まだ幼い少女は逃げていた。

少女だけではない。その華奢な腕を掴んでいる母親も、その町の全員も逃げていた。

何故か？

生き延びるためだ。

…最も、少女は母親のされるがままになっているだけなのだが。

町ではひっきりなしにサイレンが響き、後にくるであろう危機を知らせている。

少女は、母親に華奢な腕を掴まれつつ、分けもわからないまま同じように全力で逃げていた。

「ミサイルだ！！」

不意に誰かが叫んだ声に、その場に居合わせた全員が空を見上げる。

みさいる？

なんだろう、それ？

少女にはわからなかった。

自分の目に映っている空に見える無数の黒い点が、人々の命を奪い、人々が作り上げてきたものをいとも簡単に壊す兵器である事を。

「……！」

自分の名を母親が叫ぶ。

阿鼻叫喚。

人々はパニックに陥り、そこは地獄絵図ともいえる光景となる。

やがて、その黒い点が徐々に近づいてくる。

それを思わずぼけつと眺めてしまう少女。

母親が、自分の娘である少女を抱きしめる。

そして、その黒い点は炸裂した。

彼女等のはるか上空で。

それも、突如飛来した光線によって。

「…え？」

ミサイルが自分たちの近くで炸裂すると思い、自分の娘をきつく抱きしめていた母親は、思わず間抜けな声を出してしまった。

彼女だけではない。

自分たちへの脅威が一時消え去った事に驚きを隠せず、町の住民からは困惑の声が出る。

上空では、どこから飛来する薄いピンク色の光線が、的確にミサイルを打ち抜いていた。

それはミサイルだけでなく、そのミサイルを投下した戦闘機も的確に打ち抜き、爆炎と煙に変える。

一分もしない間に、町の住民に迫っていた脅威は全て消え去る。

そして、それは現れた。

一見すると、それはヒトガタに見える。

だが、確かにそうだ。そのシルエツトは紛れも無く人間。まるで、人が何かのパワードスーツを着ているようだった。

そして、その背中から両肩に配置されている、特徴的な翼状のストラスターのようなもの。

そこから放出されている淡い白銀の光子が、少女にとって印象に残った。

「きれい…」

思わずそんな声が出る。

それは町の住民たちも同じようで、次々と感嘆の声を漏らしていた。

暫くしないうちにその場に停滞していたヒトガタは飛び去り、都市部の方へと向かっていった。

「き…救世主だ…」

誰かが、そんな声を出す。

「あれは…あの聖騎士は…我々の救世主だ…!!」

パラディン

そして、大歓声。

届かないであろう事は承知している。だがそれでも、住民たちは自分たちを救った「救世主」という名の聖騎士パラディンに対する賞賛だった。

その中で、少女は呟く。

「わたしもああんりたいなあ……」

誰かのために戦う救世主。

このとき少女は、先ほど現れた聖騎士パラディンに対して微かな憧れを抱いた。

「そうね……」

自分の娘を後ろから軽く抱きしめ、母親は言う。

「もし……あなたが人の……誰かのために行動したいと思えば……きっと……」

少女の視線は、いつまでも聖騎士パラディンが飛び去った方向へ向いていた。

2017年5月24日。

後に「白騎士事件」と呼ばれるようになる日本近海での一件。

第二次北欧戦争終戦。

二体の騎士は、世界の運命を加速させる事となる。

0・騎士の覚醒（アウェイニング）（後書き）

明確な年月、月日を設定してしまいました。

不評ならば少し考えます。なにぶんこつこつ細かい設定にこだわってしまう性質なので…

希望があれば、オリジナル主人公の設定及びこの二次創作内での世界観などの設定を出したいと思います。

既に設定等が自分の中で出来上がっているので。

まあ、出したほうがいいんだと思いますけど。

指摘、感想お願いします。

人物設定・世界観設定・用語集（前書き）

ここでは、世界観等の設定および、一夏と並ぶもう一人の主人公の紹介をしたいと思います。

書き忘れましたが、本作品はダブル主人公制度でいきます。

人物設定・世界観設定・用語集

金寺龍輔 (Ryusuke Kanadera)

本作の主人公の一人。表向きは日本出身。本編開始時24歳。

・ 一年一組副担任。身長180センチメートル。若干はねた黒髪で、髪型はあまり気にしていない。

・ 普段は紺色のYシャツの上に黒いスーツを着用している(全身真っ黒)。明るい色の服を着る事は絶対がない。

・ 性格はクールで無愛想。己の感情はほとんど出さない。やや屁理屈が多い現実主義者。

・ 出生から21歳までの経歴が全世界のデータベースから削除されている。金寺の全ての経歴を知るのは束、千冬、更識楯無のみ。

・ 本編開始の二ヶ月前にIS学園の教師に就任する。一カ月半の教員研修を受け、2025年度四月から一年一組の副担任となった。

世界観設定

・ 西暦2025年。

・ 再生可能エネルギー、電気自動車などが完全に普及、量子コンピュータ、ゴツタルドベーストンネル、リニアモーターカーの完全実

現、宇宙旅行が本格的に始まるなど、科学技術の発展が著しい。

・地球温暖化、森林破壊などの環境問題深刻化を食い止めるため、全世界が一丸となってその問題に取り組んでいる。

・時を同じくして世界各国で軍事開発が目覚ましい発展を遂げており、それ故第二次冷戦状態になりつつある。

ちなみに、核兵器及び原子力エネルギーは全て封印されている。

・ISが登場して以降、軍隊の重役にはISを操縦できるといふ事で女性が優遇される傾向となり、それに乘じて女性優位を掲げる政党が増えている。

一部では女尊男卑を唱える者もあり、それらに関する男女差別が社会問題となっている。

・ISは表面上、スポーツ用のパワードスーツ及び宇宙服となっているが、現存するISの六割が軍事転用されている。

女性優位の風潮は、軍内では当たり前で、一部の社会にも浸透しかけている。

インフィニット・ストラトス

・宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかったが、「白騎士事件」に加えて北欧戦争を強引に終了させた事もあり、従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡り、宇宙進出を兼ねて飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がISに移っていった。

・開発者は宇宙進出を第一にして造ったのだが、それは一向に進ま

ず開発者が第一に危惧していた軍事転用が主になってしまおうという、皮肉な事態となっている。

・ISは核となるコア（正式名称インフィニティ・コア。金寺曰く「無限炉」。）と、特殊カーボンによって形成される腕や脚などの部分的な装甲であるISアーマーから形成されている。

・コアが最終的に埋め込まれる場所は機体によって違う。場所によってコアエネルギーの伝達力が変わる事は特別な細工を施さない限り無い。

・コアによって各装甲に伝達されたエネルギーによって、絶対防御とシールドバリアが構成される。

・初期設定と最適化処理を終えて、特定の人物の専用機となったISのコアは、実質的にその人物の肉体と一体化する。金寺曰く「その人間の第二の心臓と脳みたいなものになる」。

故に、常に搭乗者とコアの間で意識・動作伝達が行われる。

・武装を素粒子レベルに分解して、収納する事が出来る（一般的には、量子化させて保存できる特殊なデータ領域がある、といわれている）。

・量子コンピュータの搭載に成功している。機体のOSなどのシステムは、この量子コンピュータによって構築される。

・搭乗者の戦闘経験蓄積や、精神の成長などの要素が絡む事で、それにコアが反応して形状や性能を大きく変える形態移行が行われる。

・現在、全世界に467のコアが存在し、ISそのものは464機

が存在（封印された白騎士を含めて）。

パッシブ・イナードナル・キャンセル

・通称PIC。日本語表記は「受動的な慣性制御装置」。

シールドバリアによって発生する空間干渉システム。これを量子コンピュータで制御する事で、浮遊・加減速などを行うことができる。

ハイパーセンサー

・ISに搭載されている量子コンピュータによって構成される高性能センサー。

シールドバリア・絶対防御

・全てのISに備わっている特殊防衛能力。

コアから各装甲に伝達されたエネルギーを強固な膜として展開し、あらゆる衝撃などを緩和する特殊システム。

北欧戦争

・2017年5月23日に開戦したイギリス・スペイン側陣営対ド

イツ・フランス側陣営による大規模になると思われた戦争。

・きつかけは、イギリス、デンマークらと同盟を結んでいたスペインがフランスの国防基地に空襲を仕掛けたことから始まる。

・両陣営の戦力は拮抗状態であり、空襲などで多くの民間人に被害が出る、と思われた。

・しかし三日後に突如、全軍のミサイルがハッキングされ日本へ向かっていった（白騎士事件）と同時、ISが両陣営の交戦領域に介入した途端自体は一転。ISの圧倒的性能により二日半で両陣営が完全に沈黙。

双方は停戦協定を結び、軍事同盟も破棄する事になった。

後にフランス国防基地への空襲を企てたスペイン軍の過激派は拘束され、極刑を宣告された。

・ちなみに、何故ISが両陣営を圧倒できたかという点、開発者曰く「試作型だから想像以上に性能がぶっ飛んでしまった」との事。

これにより、以降に作られたISは意図的に性能が抑えられている。

・その開発者を両陣営が見逃すわけが無く、様々な国家が強引に引き入れようとしたが、それに辟易した本人は祖国である日本を選んだ。

・この一件を境にISが様々な方面で認められるようになり、軍事に、宇宙進出に役立つ事となる。

IS操縦者育成特殊国立高等学校

・アラスカ協定に基づいて日本に設置された通称、IS学園。2019年10月10日創立。

・所在地は、日本の神奈川県藤沢市沿岸部。ちなみに、江の島が意外と近くにある。

・学科は、普通科（一学年）、操縦科、整備科、宇宙専攻科（二、三年）がある。

・一学年は一クラス30人で6クラス。学年全体180人、二学年は全体で179人、三学年は全体で185人。2025年4月6日現在、生徒総数544人。

通常の高等学校の平均と比べると、やや少ない。これは学園が所持しているISの数（50機の訓練機が存在）に関係している。

・生徒総数544人の内、543人が女子。男子は織斑一夏一人となっている。

当初は男女共学だったものの、元からISに関わろうとする男子も少なく、初期に入学した男子も全員中退したため、実質的な女子高となっていた。ゆえに、洗面所などの施設の七割は女性用のものとなっている

・校舎以外の主な施設に、訓練・試合用のアリーナが第一から第六まであり、二人一部屋の学生寮、大食堂、大浴場、ウェイトルームなどがある。

・学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織で

あると学園の関係者に対して一切の干渉許されないという国際規約が存在し、それ故新技術の稼動試験などに適している。

・制服は白を基調とした特殊なデザインになっている。個人のカスタムが自由で、上着のスタイルから下履きまで生徒の個が現れる。

胸元のリボン（女子のみ）の色は学年ごとに違い、一年は青、二年は黄、三年は赤となっている。

・職員は、幾度にわたる面接や試験を経て決められる。IS学園の教師である以上、その選考は極めて厳重。

倉持技研

・山梨県甲府市の山間にある、日本最大のIS開発社。世界シェアは第一位。金寺が二年前に一時期在籍していた。

・【打鉄】、【白式】などがここで開発された。IS学園卒業生の最も多い就職先である。

・社名の由来は社長の苗字に由来する。

バッキンガム・ファクトリー

・イギリス国最大手のIS開発社。

・一年前に国内の二強であったウェールズ・ファクトリーとリヴァプールが合併した企業。世界シェアは第四位。

・名の由来は、新しく作られたファクトリーがバッキンガム宮殿の

近くであることから。

人物設定・世界観設定・用語集（後書き）

物語が進み次第、随時更新して行きたいと思います。

人物設定に関しては、今の所オリジナルの主要人物は金寺龍輔一人です。

彼が1年1組の副担任という事で、山田先生の出番がなくなったように見えますが、見せ場はしっかりと作ります。主に本業のほうで。

尚、既存の登場人物に関しても少々設定が違ったりしますが、それは後に書きたいと思います（設定が違う理由は、ほとんどが金寺が関わった事によるもの）。

世界観やISの設定ですが、原作を軸に足りなかったり大雑把なところを更に付け足したりしてみた結果です。

色々めちゃくちゃに見えるかもしれませんが、自分なりに考えた結果です。

ちなみに、何故IS学園の所在地に神奈川県藤沢市を選んだかというところ、沿岸部にあるというところ、首都・東京からのアクセスなどを考慮した結果です。

東京湾沿いにあるのはいくらなんでもおかしいですね。

ずっと「IS学園ってどこにあるんだろう?」と黙っていて、この二次創作を書く際に、

「どうせだから自分で決めちゃえ!」

はい単純ですな俺。
そんな自分が嫌になります。

でも、こういうところまでこだわりたくなる性分なんです。お許しを。

こういうのが嫌いな人、拒絶したい人には、まことに申し訳ございません。

既存のコアの数を踏まえると全世界に存在するISの数がおかしいですが、それにはしっかり理由があります。

後に作中に出てくる単語で「これなんだ？」というのがありましたら感想を経て聞いてください。
確認次第載せていきます。

何か指摘があればお願いします。

一・(前書き)

いよいよ、一夏と金寺の物語が始動します。

ちなみに、大体5章ぐらい書き溜めているので、感覚を短くして投稿していきます

日本の神奈川県藤沢市に存在する、IS学園 正式名称、IS
操縦者育成特殊国立高等学校。

世界初の、ISに関する人材 主に操縦者の育成を目的とさ
れた、高等学校である。

運営及び資金調達は日本国が行い、得られた技術は協定参加国の
共有財産として公開する義務があり、黙秘権は一切無い。

何故そのような事になったかという点、数年前の国連理事総会に
て、EUサイドが言い放った一言が原因である。

『貴殿の国の者が開発したISによって、今までの様々な常識が打
ち破られ軍事バランスすら壊してしまった。日本国は責任を持って、
それらの管理などを行い、得られた技術を他国に提供せよ』。

簡潔に言えば、このようなものである。

一部では、ISによって軍隊の大半をつぶされかけたEUサイド
の報復といわれていたが、定かではない。

これに各国は賛同。日本政府は受け入れざるを得なくなっていま
った。何せ、これを拒否すれば外交に多大なる影響が出る可能性が
あるのだ。

さて置き、この学園に入学した一年生は、まずISの基本事項や通常の高校の学習要領などを習う『普通科』に入る。

二年生時から学科が別れ、国家代表を目指す操縦者の育成に重点を置いた『操縦科』、ISの開発・研究・整備を専攻する『整備科』、本格的に宇宙進出を目指した学習を行う『宇宙専攻科』の三つに分かれる。

一見、そんなIS学園はそんな点以外普通の高校と変わらなないように見えるが、一つ特徴がある。

全校生徒が女子なのだ。

きっかけは、白騎士事件　　北欧戦争終結　　から二日後に
発覚した、ISの致命的欠陥である。

その欠陥とは、『女性にしか反応しない』。

ISは、機体装甲に触れ、そこから流れ込んでくるISの情報を読み取る事で、初めて搭乗できるようになる。

だが、どういうわけか、北欧戦争終結後、ISが男性に反応せず、女性にしか反応しなくなってしまったのだ。

原因　　不明。

この事態には、生みの親である篠ノ之東も頭を抱えざるを得なくなつたといわれている。

その原因が、ISの中枢を担う動力源『インフィニティ・コア』

主な呼び名は「コア」　　にある事は容易に想像できたら

しいが、何をしても原因の解明には至らなかったという。

結果、新世代のパワードスーツであるISは、『女性専用』のレ
ッテルを貼られることとなったのだ。

それゆえ、自然と 必然的に、ISに関する事業、団体には、女性が多く関わるようになる。

この学園も当初は男子がいたが、それも極僅か。その極僅かの男子も中退し、結果的にIS学園は実質的な女子高になってしまった。そのIS学園に、このたび数年ぶりに男子学生が入学する事になった。

名前は織斑一夏。

入学式一ヶ月前の入試で、偶発的な要素によってISを動かしてしまった、『世界初の男性IS操縦者』だ。

そのせいか、今年度の入学式はやけに盛り上がっていた。

このめでたい式典の日に、一人だけ出席していない教師がいた。

その教師は諸事情により、学生寮の1026室に自分の住まいを置いている。

“彼”は、本来は備え付けコンピュータしか置いていない机の上に無理やり設置した二つの大型空間投影モニターと四つの小型モニターに目を通し、手元のキーを一定のリズムで叩いている。

今モニターに表示されているのは、日本製の第二世代型IS、【打鉄】の機体スペックなどである。

六つのモニターに表示されている情報を亜音速で一気に読み取るのは常人にとって至難の業だが、それを実行しているその青年
そもそも彼は常人ではない にとっては、何の苦にもならない事だ。

「しかし…日本人は式典が好きなんだな…」

先ほど少しだけ覗いてきた入学式の光景を思い出し、キーを叩く手を止めながら青年は呟く。

もっとも、表面上日本人である彼が言うにはいささか違和感があるが。

とはいえ、このIS学園の教師になったのはつい三か月前だ。それも突然。

ここ数年ISの技術者として世界を飛び回っていた彼に正式な要請が来たのはその半月前。数年契約で、学生寮の一室を私設研究所として使用してもよいというおまけ付きだった。

彼は少し悩んだが、結局OKの返事を返した。何より施設が軒並み整っているこのIS学園なら研究に没頭できるだろうし、各国から怒涛の如く来るオファーにも辟易していたところだった。全世界のISに関する技術の48パーセントが集うこの場所は、彼のような研究者にとって最高の環境と言っても過言ではない。

椅子の背もたれに体重を預け、脳裏に浮かぶこれまで世界を飛び続けた日々の記憶に、彼が意識を集中させていると。

コンコン。

部屋のドアをノックする音が耳に入ってきた。

「…誰だ」

「私だ」

女性にしては鋭い、凜とした声を聞いて、彼はゆっくりと立ち上がった。一応、彼女はこの学園において自分の上司のようなものである。

「何か用で？」

「馬鹿者、今日は入学式だろう。一年一組の副担任になったお前に用が無いわけがない」

「…それもそうか…」

女性　織斑千冬の言葉に嘆息すると、彼はベッドの近くにある洋服掛けにある黒のスーツを着る。

彼の服装は黒のスーツ上下に、上は中に紺色のYシャツを着込んでいる。黒は彼のパーソナルカラーのようなもので、何色にも染まらずに自分らしさを貫く彼に合う色だ。

右拳で胸元を数回軽く小突き、大きく息を吸い、吐くと、彼はドアへ歩んでいく。

ドアを開けると目の前に千冬の姿があった。彼女は一年一組担任である。

「悪いがこちらは職員会議があつてな…それまで金寺、クラスを頼む」

「オーライ。行ってくるぜ」

千冬に一言だけ言って、金寺龍輔は、一年一組の教室へ向かう。

世界は、急速に動き出す。

この学園内では、男性というのはまさに希少生物で、好奇の目で見られることが多い。

一年一組の教室内、真ん中の一番前の席に座る少年 織斑一夏は、まさに今そんな視線を真に受けていた。

何せ、一年一組30人中、彼以外の生徒29人は女子なのだ。声を掛けられているわけではないが、視線が身に突き刺さる。ヒソヒソ話している声も聞こえるが、十中八九一夏のことを話しているのだろう。

とにかく、居心地が悪く、つらかった。

女子だらけの学園 親友曰く、『楽園』に一夏が行く事になると知ったとき、彼の友人たちは揃いも揃って一夏のことを『羨

ましい』と言ってきたのだが、今の一夏は彼らに『これが現実だ！』と吼えてやりたかった。

そんな中で彼の左側、窓際の席にいるポニーテールの少女の名前を彼は知っている。

篠ノ之箒。小学一年生から四年生まで時を共にした剣道のライバルで、その苗字の通り、ISの基礎理論を提唱した篠ノ之束博士の妹である。

……なのだが、どうも彼女は先ほどから、近寄りがたいオーラを放っている。一度視線が合ったが、何故か箒はすぐに視線を逸らしてしまった。

これから先の学園生活を想像し、一夏が本格的に心配し始めたとき、教室のドアが開いて一人の青年が入ってきた。

大半の女子生徒から、黄色い声があがる。それもそのはず、青年は一般的にイケメンと呼ばれるような顔立ちをしている。

一夏はそれ以上に青年の醸し出す雰囲気思わず声をあげそうになった。

整った顔立ちに、鋭い眼、若干ウェーブがかかった黒い髪。

だがそれ以上に一夏の目に焼きついたのは、色が違う眼
オ
ツドアイだった。

左眼が漆黒なのに対し、右眼は禍々しい鮮血のような赤色。
それがあまりにも、印象に残った。

生徒の歓声に溜息をついた青年は、一同を黙らせつつ教壇に向かうと、やや面倒くさそうに手元のコンソールパネルを操作する。程なくして、教室前方の電子黒板に『金寺龍輔』という文字が浮かび上がった。

「今からSHRだが…手短に終わらせる。俺は一組副担任の金寺だ。担当は主にISの基礎理論、世界史、整備技術。…以上だ、何か言いたいことあるか？」

言葉を切った途端、およそ三分の二の生徒が挙手。無論、金寺に対する質問だろう。

その光景に、一夏は少なからず恐怖を覚えた。

一人目、出席番号一のショートヘアの子。

「誕生日はいつですか？」

「二月十八日」

二人目、同じくショートヘア。

「趣味はなんですか？」

「研究、一人旅」

三人目、ロングヘアの…以下全省略。

こんな感じで金寺に対する質問が飛び終えたところで、金寺は一息つくつと教室を一瞥した。

一夏はというと、

「…なんか凄いやこの人」

怒涛の質問攻めにも一切動揺することなく、素っ気無く答えるその姿は彼にとつてある種の勇者にも見えた。

「…そういうわけだ。それで　　「金寺先生、もう一つだけよろしいですか？」

改めて口を開きかけた金寺に、再び質問が投げかけられる。

ほぼ全員の視線が、音源に向かう。声の主は、縦ロールのある長い金髪の少女だった。

「何だ、言ってみる」

「…“男性の”金寺先生は、どのようにISに関わってきたのですか？」

『男性の』という部分を強調した少女に、一夏はやや違和感を抱いた。まるで、『何故男性のあなたがISに関わっているのか』とでも言っているような感じだ。

当人の金寺は意に介する事も無く、簡潔に答えた。

「俺は数年前まで一匹狼の研究者だった。最近はいろんな国で技術開発に携わってきたが…ああ、みんな知らねえよな。まあビーム兵器に関する基礎理論をくみ上げたり、非限定情報共有を証明したり、適当になんやかんやしてたんだ」

非限定情報共有　　シェアリングとは、コア同士が行う情報の共有のこと。これを各自が進化の糧にしており、それにより形態移行などが行われるといわれている。

これはビーム兵器と同様、近年の研究によって現実的な理論が築かれたばかり。そしてそれらの理論を最終的に確立したのが、この金寺龍輔なのだ。

だが、それを“適当に”と言っただけのけた金寺の神経が、一夏には今ひとつ理解できなかった。

「終わりか？」

「はい、…無礼な質問をして申し訳ありませんでした」

「気にするな、俺は気にしない」

それを聞き、少女は納得したようで納得していないような様子で
咳くように言った。

彼女にしてみれば、やはりISに男性が関わっている、というの
に違和感を覚えていたのだろうか。

一夏がそんな事を考えていると、再び教室のドアが開き、今度は
スーツを着た女性が入ってくる。

その女性の名は、

「げえっ！？千冬姉！？」

自分の姉、織斑千冬だった。

一夏が座りながら大声をあげた直後、彼の頭で炸裂音が響く。千
冬の持つ出席簿による殴打攻撃 通称、「出席簿アタック」
の音だった。

「…学校では織斑先生と呼べ」

「りよ、了解…」

出席簿の一撃とは思えない、尋常でない鈍痛に頭を抱える一夏を
よそに、千冬は教壇にいる金寺に話し掛けた。

「すまない、遅れた。ご苦勞だったな、金寺」

「苦勞に値しない」

ぶつきらばうに短く言って教壇から離れる金寺を見て、千冬は苦
笑を浮べた。

「全く…お前は本当に変わらないな」

「そう言うお前も前に再開した時と変わってなかったけどな」

「時々言われる」

再度苦笑を浮かべ、千冬は金寺に変わって教壇に立つ。

自分の姉が教壇にいる。この状況が読めない一夏をよそに、千冬は口を開く。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが私の仕事だ。これから機動兵器を扱っていく身として私の言う事はよく聞きよく理解しろ。これは絶対だ。反逆するのは勝手だがな」

悪い言い方をすれば、横暴とも取れる物言い。一夏は絶句したが、

「キヤーーー!!!」

「千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から!!!」

「私は稚内から!!!」

「あの千冬様にご指導いただけるとはなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

女子生徒の大半はこの通り。

それもそのはず、一夏の唯一の肉親である彼女は第一回IS世界大会『モンド・グロツソ』の格闘部門及び総合優勝者で、公式戦負け知らず。事実上の、世界最強である。

それはすなわち、この世の女性の憧れなのだ。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

たぶんそうだろうな。

くしくも、一夏と金寺の考えた事は全く同じだった。

それを証明するように、数人の女子が再度黄色い声をあげる。

「きゃあああああっ！！お姉様！もつと叱って！もつと罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をしてく！」

最早危ない領域に達しているのも何人かいたが、一夏は意図的にそれを聞き流し、自分の姉に質問をした。

「千……じゃなくて、お、織斑先生はいつからここの教師に……？」

「それは後だ、いずれ説明する。今は、SHRを終わらせるぞ」

千冬の言葉に一夏が軽く頷くと、これらのやり取りを聞いた数人の生徒が気づいたように声をあげた。

「え……？織斑君って、千冬様と知り合い……？」

「親戚とかなのかな？同じ名字だし」

それを聞いて一夏は少なからず驚きを露にする。

てつきり一夏は、自分と千冬が姉弟であることが知られていると思っていた。織斑という苗字は、それほど多くいるものではないはずだ。

「それじゃあ世界で唯一男でISを扱えるっていうのもそれが関係

して……？」

それは無い。

別に確信があるわけではないが、本人は直感的にそう思った。

いくらなんでも、それが関与しているとは思えない。確か国際IS連盟のお偉いさんもそう言っていた。

だとしたら、それ以外に何か理由が

そんな思考を遮断するように、チャイムが鳴り響く。

「朝のSHRはこれで終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半年で覚えてもらう。その後、実習だが基本動作は半月で体に染み込ませる。これは絶対だ。いいな？」

直後、一糸乱れぬように生徒たちの返事が響く。

呆れるように軽く息を吐いた一夏は、先ほどとは別の考えに没頭した。

(機動兵器、ねえ……)

いまや、ISが各国軍の要である事は、当然一夏も知っている。

それを、世界最強の弟である自分が操る事になったというのは、正直運命のいたずらのようなものを感じさせた。

そもそも、一夏はIS学園ではなく、生活面で姉 千冬を困らせないためにも、学費が安く就職率が高い私立愛越学園を受験する予定だった。

だが、彼にとって不幸だったのは、その愛越学園の試験会場が市

立の多目的ホールであり、IS学園の試験会場もそこにあつたことだ。生憎、当時中学三年生だった一夏はホール内で迷つてしまい、係員に聞いてもよく分からず八方塞の状態だった。

そんな中、迷い込んだ部屋　実は立ち入り禁止区域なのだが、一夏は知らなかった　にあつた格納状態のISを発見。興味本位で触れた一夏だったが、どういう訳かISが起動してしまい、その場に駆けつけた試験官に目を付けられたのだ。

その後の展開も急激なもので、一時期国際IS連盟に身柄を保護された後、『在学中はありとあらゆる機関、団体からの干渉を受けない』IS学園に半ば無理やり入学させられたのだ。

正直、望んでこの学園に来たわけではないが、こつなつた以上仕方が無い。

これから自分は、今世紀最強と謳われる機動兵器を扱う事になるのだ。気の緩みなど許されない。

(まあ、とにかく真面目にやっていますか…)

大して深く考えず、軽く背伸びをした一夏は、一限目のIS基礎理論の準備をする事にした。

その名の通りとしか表現しようが無いこの授業は、ISに関する基礎を徹底していく意味合いで行う。

この授業を行うのは、基本的に金寺だ。

ちなみに、金寺が授業を行うのはこれが初めてではない。彼が赴任したのは昨年二月。それから終業式までの一ヶ月ほどの間に、金寺は教育実習生のように教務について学び、今年度から本格的に教師となったのだ。

授業の具体的内容だが、まず最初はISの詳細な概要が主だ。中には、ジュニアスクールなどで数年前から学び始めているものもあるが、大半の生徒はそこまで深入りしていない。

よって、まずは基礎を徹底する事から始めるのだ。

授業の進め方としては、生徒たちが入学前に配布されたISに関する参考書、という名の『電話帳もどき』にある程度目を通して、いる事を前提としている。

一応IS学園は進学校に値するので、当然といえば当然であった。

金寺が最初に担当したのは一年三組。これまた生徒たちから随分な歓迎をもらったが、当人は気にしていないため特別困る事は無い。さしたる障害も無く、金寺は授業を終えた。

難なく初陣を終え、書類整理のために一旦職員室に来た金寺に、一人の女性が声を掛けた。

「お疲れ様です。初めての授業、どうでした？」

彼女の名は山田真耶。今年度から一学年の学年主任になった人である。

「まあ、特に楽も苦も無く、って感じた。千冬のクラス、なかなか楽しそうな面子じゃないか？」

金寺がそう返すと、真耶は少しがっかりした様子だった。どうやら、先輩面をしたかったらしい。

「ああ、でももし分からない事があれば何でも聞いてくださいね！」

他の女性と比べて豊富な胸をはり、堂々とした様子で真耶は言う。最も、短く髪を切りそろえ眼鏡を掛けている童顔の彼女には、威厳などという言葉が全く似合わないのだが。

「…で、アンタはこの学園何年目なんだっけ？」

「あ、そういえば言ってますねでしたね。私は今年度で三年目です」

「…そうか。じゃあま、何かあったら宜しくな」

「はい！改めて！」

喜びを露にする真耶が、何かの小動物に見えた金寺だった。

無論、真耶が金寺のことを職場の同僚としてでなく、一人の男性として見始めていることを彼は知らない。

一・（後書き）

第一ピリオド終了。

さて、実際金寺は結構チートだったりします。

金寺龍輔と出会ったことにより、原作と比べて一夏たちの運命はかなり変わっていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3531y/>

Infinite Stratos -Futures Road-

2011年11月9日02時04分発行